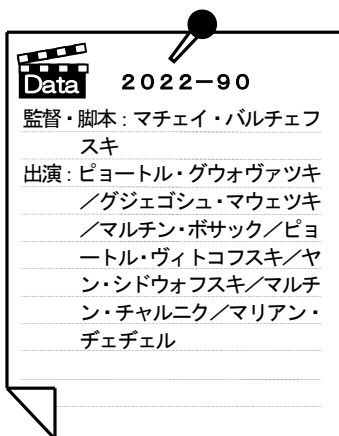




みどころ

“ボクシングもの”、“アウシュヴィッツもの”にはそれぞれ名作が多い。しかして、その両者を結合したのが本作！しかも、実話に基づく物語だ！

アウシュヴィッツ収容所の建設は1940年。1939年9月1日のナチスによるポーランド侵攻の翌年だ。そのため、当初の囚人はユダヤ人ではなく、ポーランド人だったから、本作の主人公テディ“囚人番号77”は、いわばアウシュヴィッツ第1期生！

「グラディエーター」はコロシウム（円形闘技場）で戦う奴隷だったが、テディが戦ったのはパンのため、薬のため。その奮闘はお見事だが、軽量級・防御型の彼の最後のお相手は？

そして、その直後の移送はなぜ？どこへ？彼のその後は？その歴史的検証もしっかりと！

■□■「アウシュヴィッツもの」初の「ボクシングもの」が！■□■

私は2020年5月に『ヒトラーもの、ホロコーストもの、ナチス映画大全集—戦後75年を迎えて—』を出版し、合計72本のヒトラーもの、ホロコーストもの、ナチス映画を収録した。しかし、そこには「ボクシングもの」は1本もなかった。言うまでもなく、「ボクシングもの」の代表は『ロッキー』シリーズだが、それ以外にも世界的な名作が多く、日本にも『あしたのジョー』等の名作がある。

古代ローマ帝国の時代に、ローマ市民の娯楽場として円形闘技場「コロシウム」があり、そこには戦う奴隷としての「グラディエーター」がいたことは、ラッセル・クロウが主演した『グラディエーター』（00年）やカーク・ダグラスが主演した『スパルタクス』（60年）等で有名だ。しかし、ヨーロッパ地域最大の絶滅収容所であるアウシュヴィッツ収

容所を舞台にした「ボクシングもの」があったことにビックリ！そのボクサーは、ポーランド人のタデウシュ・“テディ”・ピエトシコフスキだ。

■ロッキーは架空！本作は実在のボクサー！驚愕の実話！■

「アウシュヴィッツもの」と「ボクシングもの」を組み合わせれば、きっと面白いはず！『ロッキー』シリーズとして一世を風靡した「ボクシングもの」である『ロッキー』（76年）は、1975年のモハメド・アリの試合に感銘を受けたシルヴェスター・スタローンが、それをヒントにわずか3日で書き上げた脚本を映画会社に売り込むことによって成立したそうだ。それを考えると、「アウシュヴィッツもの」と「ボクシングもの」を組み合わせる架空の物語の脚本も、3日あれば書けるのでは？

そんな考え方もあるかもしれないが、マチェイ・パルチェフスキ監督は、収容所の中でも生きることを諦めなかったポーランド出身の実在のボクサー、タデウシュ・“テディ”・ピエトシコフスキに焦点を当て長編デビュー作の脚本を書き上げたからすごい。その動機や活力になったのは、きっとマチェイ・パルチェフスキ監督自身がホロコースト生存者の孫だという“出自”によるのだろう。

アウシュヴィッツは、ユダヤ人を大量虐殺するための“絶滅収容所”として有名だが、当初収容されたのはポーランド人だったらしい。収容所の囚人たちに通し番号がつけられたのは当然だが、テディのそれは77番。つまり、彼はアウシュヴィッツに最初に送込まれた囚人たちの1人で、いわば“アウシュヴィッツの第1期生”ということだ。時は、1940年。1939年9月1日のナチスによるポーランド侵攻の翌年だ。

本作冒頭、そんなシークエンスが登場するので、それに注目！ここでは、まず収容所を建設するための労働力が求められたから、労働力にならないとみなされた高齢者や病人、女性、子供はシャワー室だと聞かされてガス室に送られ、男たちには過酷な労働が命じられた。第2次世界大戦後、日本兵が抑留されたシベリアに比べれば、アウシュヴィッツが極寒でないのはありがたいが、それでも寒い。そして、食事は、1日1回の水みtainなスープだけ。これでは体力が持たず、男たちも順次死んでいくだけ。テディを含め、誰もがそう思ったが・・・。

■試合に勝てばパンが！それなら・・・■

『サウルの息子』（15年）（『シネマ37』152頁）では「ナチスが収容者の中から選抜した死体処理に従事する特殊部隊」である“ゾンダーコマンド”の存在をはじめて知ったが、本作では“カボ”と呼ばれる囚人の中から選ばれた統率者がいることをはじめて知ることができた。そして、本作では、“77番”がバンタム級のボクサーであることに気付いた、ある“カボ”が、収容所長のヘス（グジェゴシュ・マウエツキ）たちに「退屈して街で問題を起こしていた衛兵たちのいい気晴らしになる」と進言したところから、アウシュヴィッツ版の「グラディエーター」が始まることになる。ぶっつけ本番でリングに上がったテディだが、バンタム級の王者としての力は健在。相手のパンチを軽くかわし続けた

後、反撃を加えると相手はあっけなくダウン。これにてテディは約束のパンにありつくことに・・・。

アウシュヴィッツでは、反抗する者はもとより、弱者も容赦なく殺されたから、大人と同じ肉体労働に就く少年ヤネック（ヤン・シドウォフスキ）は大変。ある日、テディが盗んだ果物のせいで、ヤネックも体罰を受けてしまったから、さらに大変だ。そんなヤネックのためにも、以降テディは「試合に勝てばパンを！」の声に釣られて対戦を繰り返したが、さて、彼のプライドは？本心は？

■□■テディは軽量級の防御型！それでも超重量級のKOを！■□■

来る8月19日からは『ロッキー VS ドラゴ ROCKY IV』（21年）と題された、『トップガン』、『バック・トゥ・ザ・フューチャー』と並ぶ80年代の金字塔が、装いも新たに大スクリーンのリングで激突する！これは、コロナ禍で時間ができたスタローンが、すべての映像に目を通して何百時間もかけて見直し、ロッキー、アポロ、ドラゴの戦いまでの道のりに焦点を当てて物語を再構築したものだ。当初は、ロッキーの最大の敵は同じ重量級のチャンピオン、アポロだと思われていたが、その後登場するソ連の殺人マシーン・ドラゴは、超重量級。シルヴェスター・スタローンでさえ、その体重、身長において大きく劣っていた。

ボクシングは、レスリングや柔道とともに体重別が厳格なスポーツ。しかし、それは公式のリングでのことで、アウシュヴィッツの「グラディエーター」ではそんなルールは無視。したがって、バンタム級の王者だったテディの対戦相手には重量級の男もいたが、テディはそれらを次々と倒し、アウシュヴィッツ収容所で無敵のチャンピオンとして君臨したから立派なものだ。そのため、彼が獲得する報酬としてのパンは相当な量となり、囚人たちを喜ばせていた。しかし、ある日、アウシュヴィッツにやってきた元ボクシング選手だったというドイツ人は超重量級。これではいくらフットワークが軽くとも、防御型のテディでは到底、太刀打ちは無理。誰もがそう思ったが、あえてあごを出すようなリスクな戦法の後、超重量級をノックアウト！見事に勝利を！

■□■なぜ移送？ナチス側の意図は？テディのその後は？■□■

ラッセル・クロウが主演して主演男優賞等を受賞した『グラディエーター』は、導入部も途中経過もハイライトも、格闘シーンを存分に楽しむことができた。しかし、本作におけるテディのファイトシーンを、ナチス兵士でない私たちが楽しむことができないのは当然。私たちは勝利することによって何とかパンや薬にありつけたことを共に喜ぶしかないが、テディと超重量級のボクサーとの対戦が実現したのは一体なぜ？また、その対戦でテディが勝利した後に、テディがアウシュヴィッツからノイエンガムメ収容所へ移送されることになったのは、一体なぜ？そこに透けて見えるナチス側の意図は一体ナニ？

本作では、収容所長ヘスの家から、隙を見て果物を盗み取る導入部のシーンや、ボクシングの試合で勝利した後、建設現場の過酷な労働からかなり楽で食事でも適度に与えられる

ヘスの馬番として働くシーン等で、テディとヘスとの人間関係が対比されて描かれるので、それにも注目。囚人の目から見れば、ヘスの生活は王様のようなのだが、チフスで最愛の息子を失ってしまう等、ヘスはヘスで苦労は絶えなかったらしい。スパルタクスは反乱奴隷のリーダーとしてローマ軍と戦ったが、結果は敗北。しかし、敗軍の将として彼がいかなる扱いを受けたかは、同作ラストの感動的なシーンを観ればよくわかる。また、源義経は兄・頼朝の手で殺されたはずだが、なぜか半官びいきの日本では、“ジンギスカン伝説”まで生まれている。したがって、アウシュヴィッツ収容所内でテディがヒーローになっていくと・・・？ヘスがそう考えたとしても不思議ではない。その結果、迎える本作ラストにもしっかり注目したい。

2022（令和4）年8月4日記